

(有限, 無限, 被造的, 非被造的) に多種多様な異なった仕方です述語づけられる。然し, このことは存在概念の類比性を示すものではなく, 存在概念は他の概念とは別な独立した概念として, その一義性を保持する。(第一章第三節, 第二章第六節, 第三章第二~三節, 第四章 pp.152-153)

以上が本書の議論の要約であるが, 八木氏はこれらの論点を, テキストの綿密な検討に基づいて論じている。①スコトゥスの「存在の一義性」の説が, どのような根拠によって成立しているのか, ②トマスと異なる, スコトゥスの独自性という点に関して, 評者は本書から多くのことを学ぶことができた。ただ, 八木氏自身が述べている (p.156) ごとく, 本書ではスコトゥスの「存在の一義性」説が専らトマスの「存在の類比」説との対比で論じられているが, 然しスコトゥスの直接の論敵はトマスではなく, ガンのヘンリクス (Henricus Gand) である。今後, ヘンリクスの類比説がどのようなものであり, ヘンリクスとスコトゥスの論争点は何であるかを明確にしたうえで, 更に研究を進めていくことが必要であろう。八木氏のこれからの御研究の発展に期待する。

中山善樹著『エックハルト研究序説』

創文社, 1994年, 196頁。

谷 隆 一 郎

本書はエックハルトの哲学・神学の中心的位相を解明しようとしたものであって, とくにエックハルトの学問的な営みの中心たるラテン語著作に本格的に取り組んだものとしては, 我が国で最初の研究書であろう。全体として著者は, エックハルトの文脈の忠実かつ正確な祖述と再現を旨としているが, その論述の背後にわれわれは, エックハルトの生・言葉への全人格的な共感と愛惜とが存していることを察知しうるのである。そこにはまた, エックハルトを真実愛し, その著作に通暁した者にしてはじめて語りうるけれんなき信頼と憧憬とが滲み出ている。

言うまでもなくエックハルトは, かつてドミニコ会の栄えある「学匠」であり, ア

ルベルトゥス・マグヌスとトマス・アクィナスという2人の偉大な先達の後を継いで時代を担うべき人であった。が、恐らくは当時の修道会および世俗権力の政治的争いの犠牲となって不当に断罪され、歴史の表舞台から長らく放逐されるに至る。著者はそうしたエックハルトの生涯に愛惜の涙を注ぎ、その透徹した観想と思索との言葉にキリストの現存をすらすら見出そうとしているかのようである。それは、本書の論述が「秘蹟の現在」における「魂のうちなる神の誕生」という一点に収斂しているゆえんでもあろう。そこで以下、本書にあって中心的動向となっていることについて少しく言及し、今回の責めを塞ぐことにしたい。

さて、「魂のうちなる神の誕生」とは、すべての人間が神の子となる可能性を有していることの意味と構造とに、従ってまた、神の子キリストの受肉という事態に密接に関わっている。そのことの解明に本書の全体が向けられていると言えようが、そこで論述の順序がすでにして著者のエックハルト解釈をよく特徴づけるものとなっているのである。すなわち著者は、上記の探究目的を目指しつつ、まず (i)、始源（ないし神的ロゴス・根拠）*principium* について見定め、次に (ii)、神の名としての「存在」*esse* の意味を論じ、さらに (iii)、人間の神認識における道、魂の内奥への還帰の道を問い、そして最後に (iv)、秘蹟 *sacramentum* の現在ということに思いを潜めている。その際、それぞれの叙述はエックハルトの幾つかの代表的文脈に即して進められている。だが、エックハルトの厩大な原典の中からそのように選び取り再構成したこと自体、すぐれて特色ある論となっているのである。

ところで、著者によれば始源とは、「そのうちで神的ペルソナの流出が永遠に行われるところ」であり、さらには「存在」たる神自身と同一であるという。このことはむしろ、創造についてのエックハルトの基本的把握に通じている。つまり、「神は事物を知性によって存在のうちに産み出す」のであり、しかも、神によるそうした創造は、始源（＝神自身）のうちで絶えず行われているのだ。そこにあっては、いわば「知性認識的なものの絶対的優位の思想が否定的に包摂され深められている」とされる。この点、「エックハルトはアルベルトゥスとディートリヒとを継承しつつ、むしろ根本においてはトマスの系譜に連なる」が、同時にまた「トマスとは別の質の存在の思索が展開されている」と解釈されている。その要点にのみ一言触れておくとすれば、「エックハルトにあって存在は類比的ではなく、むしろ同名同義的に把握され、従ってまた「エックハルトの形而上学は静的に把握された存在一元論ではなく、帰属の

アナログアによって規定された動的な存在論である」といった方向が指し示されることになるのである。そして、それが人間把握の中心に関わることを言うまでもない。

さて、始源（神的ロゴス）と神（＝存在）とをめぐり上的ような把握は、人間の神認識がいかなる場、いかなる道において可能であるかを示すものとなる。それは著者によれば、魂の内奥に神の「像」*imago Dei* を求めて止まなかったアウグスティヌスの道を行くものであった。つまり、「魂から神に到る神認識における内在の道」が、ここに人間たる者の歩むべき本来の道となる。そのように魂の内奥への還帰によって神を知りゆく道にあって、知・認識の実りとは、神を受容し神を宿すことであった。だがそのことが人間にとって単にはかない願望に終るものではなくて、生身の有限なわれわれにおいて真に実現しうるゆえんは何なのであろうか。それはすなわち、「魂のうちになる神の誕生」という中心的な事態の可能根拠への問いであるが、本書の最終章たる「秘蹟論」は、大略、以上のような問題連関のうちに登場するのである。

エックハルトは著者によれば、神学と哲学とを何か独立の学として措定せず、むしろそうした問題領域の分化を突破して、両者の協調し一致する根源を目指す。著者はそのエックハルトの根本的志向が収斂する場に眼差しを向け、従来ほとんど論じられることのなかった秘蹟論にあえて踏み込むのである。その際、中心に取り上げられているのは聖体の秘蹟であるが、とりわけ注目すべきは、謙遜と離脱とが秘蹟に与るための不可欠の態度だとされていることであろう。それはすなわち、「自分自身と自分に固有の弱さとの認識」、「この世的なものからの離脱」が秘蹟を受容するための礎であるということにほかならない。言い換えれば、聖体の秘蹟に与るとは、キリストの臨在に対して全き器となることであり、「われわれの存在、生命の始源（神的ロゴス）」への絶えざる還帰なのである。

かくして、謙遜なる自己知と離脱とによって純粹になればなるほど、われわれは「キリストに対して肉において一つになる」という。そのことは古来、教父の伝統にあって「神化」という言葉で表わされてきた事態でもあった。ともあれ、「真実の自己知・認識」と「魂のうちになる神の誕生」とは、ほとんど同一のことと語りべきであろう。ただそこでの知とは、もはや対象化された限定知ではなく、いわば秘蹟の現在への絶えざる委ねであり・愛による超越なのである。だが、そうした人間の働きの極みにおいてこそ、「恩寵が受容される」という。そこにはある「特有の循環」が見出され、神の働きと人間の働きとの一種の相関、協同が存するのである。

以上概観したように、本書はエックハルトの思想の中心的なかたちを、「始源」、「存在」、「神認識」、「秘蹟」という4つの位相に注目しつつ有機的に語り出している。そしてそれは、「魂のうちなる神の誕生」という、恐らくは人間にとっての唯一の真実へと定位されているのであった。もとより、われわれの現にある姿はそうした本来的な姿から余りに遠く、多かれ少なかれ罪と非存在とのかたちを自らに刻んでいると言わねばならぬ。しかしエックハルトは、その厳しくも透徹した言葉によって、「人間とは何なのか、何でありうるのか」という一つのことを語り告げているのである。この意味で、「魂のうちなる神の誕生」という言葉は、すべての人間が神の子となる可能性を有していること、そしていわば、ロゴスの宿り、存在（＝神）の現成のかたちへと開かれていることを指し示しているのであった。エックハルトはそこに「不断の創造」という動的な事態を観想し、時間と歴史との究極の意味を洞察している。だがわれわれにとって、創造の始源・根拠たるロゴス・キリストの現前に思いを潜めることは、諸々の事物への、そしてつまりは自己自身への執着から離脱してゆくことを不可欠の契機とする。それゆえ、「魂のうちなる神の誕生」という事態は、一つの徹底した受苦、自己否定を介してはじめて、何らかの地に顕現してくるものと言うほかない。キリストの臨在に与ることとしての「秘蹟の現在」とは、かかる厳しい死と再生との道を指し示しているのであるが、恐らくはそこにこそ人間の人間としての希望が存すると考えられよう。

本書の全体は、エックハルトが古来の師父たちとともに語り告げている現実ならぬ現実に定位されている。むろんそこには、原典に即した正確な立論、思想史的学説史的な記述にも見るべきものが多いが、それらは相俟って、エックハルトの言葉に宿った人間たることの真実の、ある確かな解釈となりえている。この意味で本書は、エックハルト研究のためのみならず、さらにはおよそ学の根源を志向しそれに与ってゆくための、一つのよき道標ともなるであろう。